

尾崎實先生のこと

内田慶市

その知らせを受けたのは、2月13日の夜10時頃だったと思う。

その日の午後の便で、ロンドンから成田を経由して伊丹に降り立ち、自宅に戻って荷物の整理を始めたばかりの時であった。

「尾崎先生が亡くなられた」という萩野先生からのお電話を受け、思わず言葉を失った私は、それでもその時は何故か涙は出なかった。どこかで、この日の来るのを覚悟していたからだろうと思う。そして、先生は僕の帰りを待ってから逝かれたのだと今も思っている。

実はロンドンを離れる前日の夜には塩山君と、出発の何時間か前にも、沈先生と塩山君とで、尾崎先生の話をしていたのであった。「尾崎先生は今頃どうしていらっしゃるかな？」と。また、今回のロンドン行き当初の予定では、沈先生や塩山君と同じ日程で、16日に帰国するはずであったが、卒論の口頭試問等のこともあり、私だけが先に帰国するように変更してあったのである。「虫の知らせ」とはこのことかも知れない。

先生とは大学院の先輩後輩の関係であり、その後は同僚という関係になったが、私にとって尾崎先生は、一人の師と呼んでもいいだろう。それも今の私の研究に極めて大きな影響を与えた師の一人なのだ。

西川先生も書いておられるが、私も先生と直接お話しをするようになったのは、大阪の民間中国語講習会「愚公会」であったと思う。毎週土曜日の午後から開かれた講師学習会には、香坂先生を中心に、上野恵司さん、佐藤晴彦さん、荒川清秀さんなど市大の先輩方が沢山集まり、作品講読や教授法などについて熱い議論が行われていたのであるが、そこに、尾崎先生もいつも来られていたわけである。

先生は、口数こそ少なかったが、その発言には「重み」があった。香坂先生が最も信頼をおかれていたのが恐らくは尾崎先生であったと思う。だからこそ、『中国語学』の「旗人が教えた北京官話」の(2)以降の執筆を任せられたのだと思うし、「近世語研究会」や「中国語検定協会」を起こされる時にも、必ず、尾崎先生をその中心メンバーに据えられたのである。私が、よく香坂先生に、「先生、あの本貸して下さい」とお願いすると、ほとんどの場合、「内田君、あの本は、尾崎君に貸してあるから、尾崎君に言って貸してもらいなさい」と言われたものである。

終わりに付した「主要論文リスト」を見ればわかるように、先生は決してご自分の研究されていることを次々と世に問うという形はとられなかった。むしろ、ご自分の研究をお一人で楽しまれるという感じの方であったと思う。私が、ある人の学問研究の高さは必ずしもその業績では測れないと確信できる理由の一つには先生の存在があるのだ。

もちろん、『語言自邇集』や『官話類編』に関する先駆的なお仕事や、「清代北京語」や『紅樓夢』の「時計」に関する論文、「時間と時量」に関する論文、最後の論文となった「パンの受容度」の論文など形として残されたものはあるのだが、その背後に隠された先生のすさまじい「蓄積」に私はただただ感服し、そこから多くのものを学んできたのである。

この10年来、「西学東漸」と言語文化接触の研究が盛んになってきたが、今私たちが扱っているような資料（中国語はもちろんだが、英語、フランス語、ポルトガル語、ラテン語などの文献）を先生はもう何十年も前からひそかに取り扱ってこられたのである。遅れてきた私は、先生からそれらのことを先生との何気ない会話の中から何度も何度も教えて頂いた。先生とお話ししていると毎回、何らかのヒントが得られたものである。

「それはな、コルディエを見ろ」「あれはな、ドーリットルに書いてある」というように、モリソン、ウェード、ワイリー、エドキンス、ドーリットル、ロブシャイド、マティア、ゴンサルベス、コルディエ、方豪・・・これらの人々の名前を何度先生からお聞きしたことだろう。特に、先生はご自分では語られなかったが、「時計」に関する論文などを読むと、方豪のものから多くを学ばれたのだと思われる。いや、まさに、「現代の方豪」と呼んでもいいのかも知れない。ゴンサルベスの『洋漢合字彙』に注目されたのも、尾崎先生が恐らく最初であるし、『官話類編』や『語言自邇集』についても然りである。最近、「19世紀の北京語」という副題付きで活字本となった『語言自邇集』（北京大学出版社 2002）をもし先生がご覧になったら、なんとおっしゃられたか。きっと「アホ」の一言で片づけられたはずである。

先生は、中国語と英語はもちろんだが、多分、ポルトガル語、フランス語、ラテン語も読めていたふしがある。でなければ、あれだけのことをご存知のはずがない。とりわけ、英語の読みの速さは凄かった。

もう10年も前になるが、上海の復旦大学で一ヶ月間先生とご一緒した時は実に楽しかった。二人で、毎日、古本屋三昧である。ただ、お互いの蒐集の範囲が重なるために、一緒には行かない。そして、宿舎に戻ると、お互いの収穫を見せあったものである。私が『華英音韻字典集成』を買ってきた時は、「一晩貸して」と言われ、次の日までは、その英文の序文と、嚴復の中国語序文を全部読んでしまわれているのだ。その確かな語学力に私は「この人には勝てない」と思ったものである。

先生の書かれたものを読んだり、口頭発表を聞いたりした時の、あの「わくわく」する気持ちは一体なんなのだろうかと思う時がある。『您にかかわるいろいろなことがら』（「近世

語研究会」での口頭発表)や『古新聖經問答』とポアロの『古新聖經』の関係を論じたもの(東西研と接触研での口頭発表)「近代中国における時間の表し方」(泊園での講演記録)などは、まさにポーの推理小説を読んでいるような錯覚さえ覚えるものである。それは、単なる「言語現象」を記述するだけでなく、「文化事象としての言語」を取り扱っているからであり、「言語」の背景にある、民族の歴史、思惟方法等を併せて論じているからだろうと思う。それに加えて、現代語、近代語、古典語、ヨーロッパ諸語の蓄積である。まさに「中国学」そのものなのである。

それにしても、やはり先生には後学のために、何としてもご自分のこれまでの研究をもっともって残しておいて頂きたかった。きっと先生ご自身もそれを望んでおられたはずである。しかし、天は非情である。

先生を語る時、必ず「お酒」が話題にあがることは承知している。でも、私はあの病気に酒が一番良くないことを先生は誰よりもよくご存知であったと思う。それでも飲まないわけにはいかなかったのだ。それくらい「しんどかった」のだと私は思っている。それは同じ病気を患ったものにしかわかならない「しんどさ」なのである。それでも、やはり「遅れて来るもの」のためにもう少しだけ頑張って控えて欲しかったと残念でならないのである。

「あんた、うちに来ない？」という電話で、私の新しい人生は始まったような気がしている。あの電話がなければ、今頃は福井に埋もれていたかも知れないとさえ思っている。もちろん、それまでも、今の研究に興味は持っていたが、やはり私の今の本格的な研究は、そこから始まったのである。

実は先生から頼まれていたことが二つある。一つは、学位を取ること、もう一つは、某出版社から私が学生時代からすでに出版予定に上がっていた『中国語の表現法』を書き上げることである。前者は、私の世界観として今でも抵抗はあるのだが、一応、約束は果たした。残りの一つは、もう20数年も前に「あんたに、あれを書いて欲しい」と言われたものであるが、なかなか果たせずにいる。先生は一度はポストに投函されようとして、結局、投函せずにそのまま持ち帰ったとおっしゃっていた。先生は、それを、恐らくは世間どこにでもあるような、単なる中国語の現象のみを記述したものにはしたくなかったのだと思う。私には手に余る仕事であるが、でも、いつの日か、それを完成させて先生の墓前に報告したいものだと考えている。

今だから言うが、私の学位請求論文の最後に収めた論文は、この日の来ることを覚悟して、そのために書いたものである。そして、その論文はお別れの時に、棺に原稿用紙と共に入れてさせて頂いた。先生に気に入ってもらえたかどうかは自信がない。多分、「あんた、まだよく分かってないな」と言われそうである。確かにそういう部分があるのは事実である。「時の計り方」にしても、まだ十分に理解が出来ない部分があるのである。それでも、研鑽あるのみである。先生の学恩に報いるために。